

# 六花



2009

平成21年

俳句雑誌 りつか  
chairman Yamada Rokko  
secondary c. and the  
editor in chief Kotori  
cover designed by little bird

2月号

たん  
丹

山田六甲

鷹 匠

わ 湾わん内ないの 巖いわへ 冬ふゆの 怒ど濤とうかな  
た たちまちに人を遠のけどんどの火  
し 白魚のやうな指もて雪まろげ  
の 野仏を洗ひに来たる野の焼やき後あと  
わ 沸き過ぎし湯に雪うさぎ投げ込みぬ  
る 留守番の鸚いん哥こに 褒ほう美び鬼の豆  
い 一 等 星 寒かん風ふうの 闇 蒼あお々あおと  
く 葛くず湯ゆ溶く手先凍こえてをりにけり  
せ 背にしたる滝より氷つら柱ら落つる音

で 泥酔の酔覚ましなる寒の水  
す し巻いて恵方をさがしをりみたる  
く 楠の実の寒禽に喰ひ散らさるる  
ち 茶の畝をどんだの煙這ひ上る  
か 窯口の熱湯気となる寒夜かな  
ず 隧道を氷柱の風の通りけり  
が 頑丈な鍵かけし蔵春浅し  
お 音高く石転がせる寒の浪  
お 鴛鴦の尾を振り止まず薄氷  
く くるぶしの内を打ちくる雪つぶて

雪 原

わ 湧き出づる大寒だいかんの湯ゆに浸つかりけり  
た 魂たまを揺さぶり二月来たりけり  
し 白息はくそくを確かめながら歩きけり  
の 濃のう淡たんを許ゆるさず雪原せつげん広ひろごれり  
わ 湧わき立つる湯ゆ気に包かまれ雪見風呂ゆきみふうろ  
る 類るい焼しょうの梁はりに霜しも降りみたりけり  
い 椅子いすに膝ひざ抱いだきて過あごす二月の夜  
く 繰くり返し春の浅あきを言いひ合あへり  
せ 背せなごしに抱かかれ白息はくそく熱あつかりき  
で 田楽でんがくにうれしう舌したを焼やかれをり

す 透きとほる風呂吹割るや湯気真白  
く 組みかふる脛すねに冷たき脹ふくら脛はざ  
ち 茶室へと如月きさらぎの日を入れにけり  
か 重ね着る色のかるうて春隣はるとなり  
ず 随筆ずいひつを繰くるをとどむる雪時ゆきしぐれ雨  
が 硝子がらすに手当つれば曇くもる寒夜かんやかな  
お 音吸うて雪の積もりてゆきにけり  
お おおらかな心地にながむ垂雪しずりゆき  
く 靴箱に払ひ切れざる雪の跡

# 散り敷ける花柎に風の跡

笹村 政子

ちりしけるはなひいらぎにかぜのあと

芋の露風に瞬またたきそめにけり

かがまりて落葉搔かく手を伸ばしけり

明るさの広がり来たる冬の海

冬満月飛石づたひの母の部屋

「風の跡」という表現が光る。柎の花や金木犀などが散った色を詠む俳句は沢山ある。が、掲句のような捉え方は少なく独自性に富んでいる。それだけ手垢の付いていない言葉で柎の花が散った様を言い当てたのだ。柎の花は十二月、人々があわただしく過ぐす中に、忘れられたように咲く地味な花。しかし、その香は気高く気品に満ちている。その散った様もまた掲句のように風情が漂っているのである。ふと慌ただしさの中に柎の花の香りに振り向いて忙中閑ありの安らぎを与えてくれる作品。

ぎすとちちろ

貝森光洋

フォーマルなぎすと野良着のちちろかな  
うしろ向きに歩く中年釣瓶つるべ落とし  
心電図いしなご蝗跳ぶたび乱れけり  
蝗採り農協婦人部旗立てて  
懸大根かけだいこおもいおもいにスウイングす

帰燕きえん

梶浦玲良子

もう誰も迎へに来ない秋しぐれ  
鴟もずの贄にえ片手のばせば竹竿屋  
うしとらへ大河かがやく帰燕かな  
夜や蒼あおき絶壁をもて若わかき鹿  
ねぎらひの言葉をひとつ蛇へびの衣きぬ

魯田 ひつじ

木内美保子

畑晴れて取り散らしたる諸の蔓  
初時雨濡れて届きし訃の知らせ  
抜かれゐて鶏頭鶏冠持ち上ぐる  
魯田ひさんに野菜市場の拡声器  
日燦さん々燃えて居るごと紅葉山

風の跡

笹村政子

芋の露風に瞬またたきそめにけり  
散り敷ける花はな柵しらぎに風の跡  
かがまりて落葉搔かく手を伸ばしけり  
明るさの広がりに来たる冬の海  
冬満月飛石づたひの母の部屋



せつじゆしゆう  
雪樹集

底紅そこべに

月光の遍あまねく亘わたり茅ち淳ぬの海

K O K I A

小鳥来る水すい琴きん窟くつの水飲場

鐘撞かねつきの手の震へみる秋の暮

底紅の奥より虫の上りきし

秋霖しゅうりんに明石あかし大門おおとの灯ともりけり

冬落暉ふゆらつき

筒井八重子

海も空も見渡す限り冬落暉

ビル上に風船めける冬の月

熟れ柿がきを小鳥ら攻せめて来たりけり

石露いわの花ひねもす雨に点ともりけり

小雨なる紅葉もみじ且かつ散ちる道を行く

# 六花集

六甲選

藤原春子

露しぐれ立看板をつたひけり  
露と露かがやき合へる葉先かな  
みわたせる限り朝露刈田あと  
滅反の露茫茫々としてゐたる  
朝露を踏みしめ飛行機雲仰ぐ

堤内久美子

注連飾舟の舳先に張りにけり  
背伸びしてふらつきながら注連飾る  
注連飾雀散らしてゆきにけり  
夫のあと継ぎて厨に注連飾る  
水郷や注連飾られし舳舟